

ケーススタディ : 東京-下谷・根岸

局, 淳資 / TSUBONE, Junji / MORI, Seiji / NIHEI, Masabumi
/ ITAKURA, Fumio / JINNAI, Hidenobu / 陣内, 秀信 / 板倉,
文雄 / 二瓶, 正史 / 森, 誠二

(出版者 / Publisher)

法政大学工学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学工学部研究集報 / 法政大学工学部研究集報

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

1980-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004133>

ケーススタディ 東京一下谷・根岸

陣内 秀信・板倉 文雄・二瓶 正史
森 誠二・局 淳資*

A Survey and Analysis About the Interrelationship Between Life Style and the Historical Environment of Tokyo

Hideobu JINNAI, Fumio ITAKURA, Masabumi NIHEI,
Seiji MORI and Junji TSUBONE

Abstract

A survey and analysis about the interrelationship between life style and the historical environment of Tokyo. This study is about the human environment and its urban structure which have been formed under the conditions of historical, natural, cultural and geographical features for four-centuries from the Yedo era to contemporary ages.

As the case study, the district of Shitaya-Negishi, Taito-ku, one of the part of Tokyo was selected. In this district, it is founded that the continuity of organic relationship between building types and urban configurations to which Japanese typical natures of social organizations and dwelling blocks as urban units are well-reflected.

It is expected that the design method and theory will be established based on this study to attain forming well-balanced amenity which has been destroyed for the last decads.

§ 1. 地区の成立

東京は関東大震災と第2次大戦の2回の大火災で中心部のほとんどが焼失した。しかも、戦後復興後のめざましい高度成長の下で都市景観が大きく変わった。だがこのような東京の中心部にさえ、幾つかの地区には2度の大火災から免れ、歴史的環境と従来の下町の庶民生活が展開するコミュニティが残っている。台東区の下谷・根岸もその典型的な地区である。

まず2枚の地図を見よう。図1は明治14年のもので、図2は現状である。前者は、まだ本格的な都市の近代化が現われる前のこの地区の状態を示すものであり、江戸時代の都市構造をよくとどめている。

* 建築学科



図1 明治14年の地図(第一師管地方迅速測図)

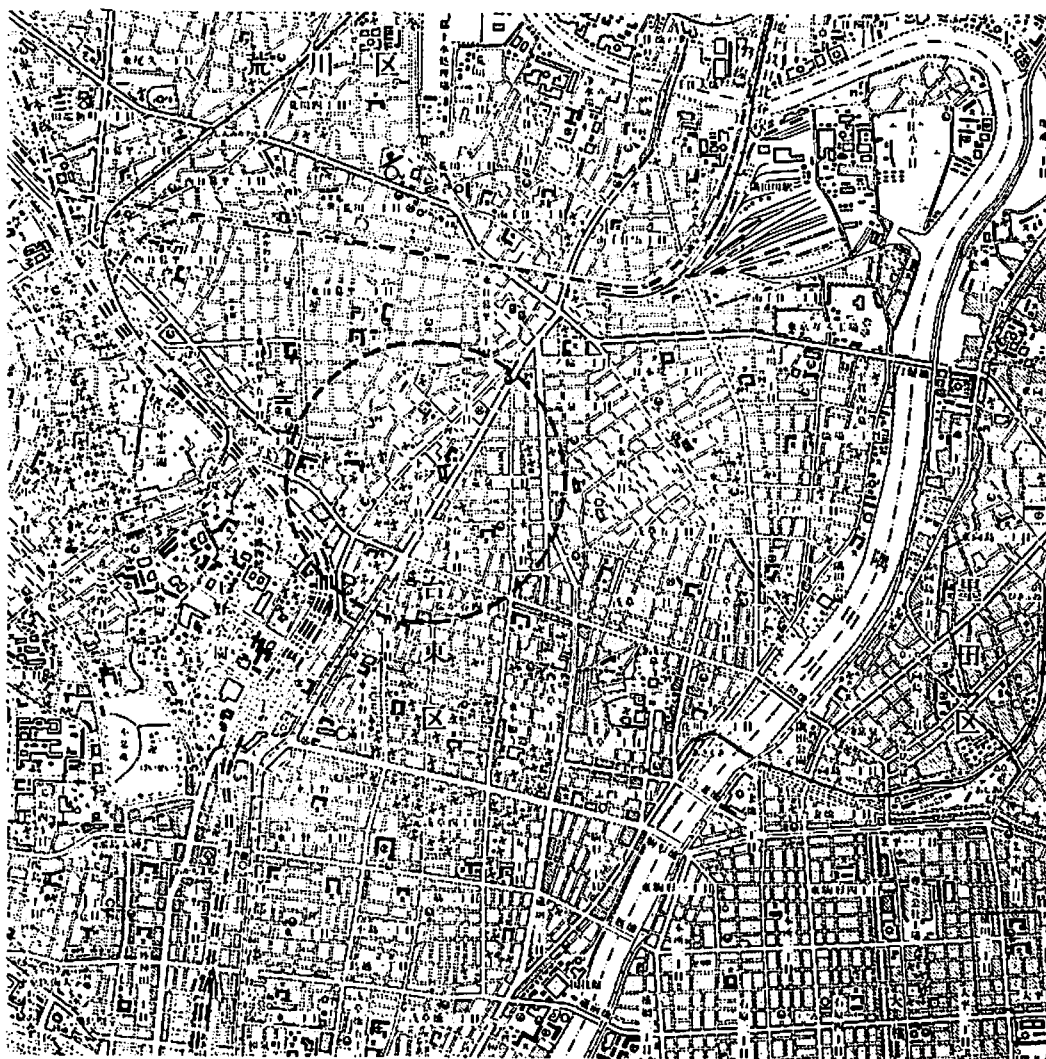


図2 現状（国土地理院 1:25,000地形図より）



図3 旧奥州街道裏道沿いの町並み

この地区は、日本橋から出発する五つの主要街道の一つ、奥州街道裏道が江戸の町から郊外に出る地点に当たっていた。従ってこの地区は面的に広がるのではなく、街道に沿って帯状に発達した。

この街道は江戸に幕府が置かれてすぐ、1600年代の初めに作られた。江戸の防衛のために北東端に当るこの地区に、数多くの寺が計画的に配置された。同時に、街道の平行に奥行36mで排水用の水路がつくられ、規則的な町割りが行われた。地割りも間口15m位にはぼそろっていた。この帯状部分が1750年頃に行政的に江戸市内に入ることから見て、その頃にはすでに高密な町人地ができていたと思える。

§2. 都市組織

こうして出来上がった都市の構造、組織は、明治29年の正確な地籍図(図4)と現状の都市組織(tessuto urbano)の観察によって解読することができる。地割りのシステムは今日までかなりよく保持されており、現存する建物で最古のものは80年前位のものにすぎないが、建物の形式、集合形式には古いものが受け継がれていると考えられる。

コミュニティの最小単位は、平均間口15m、奥行36mの一つの敷地割りである。そこでは一般に、表側に町家が並び、その間から路地が直角に入り、それに面して長屋が一例ずつ並んでいる。この路地は横丁と呼ばれるセミパブリックな袋小路状の空間であり、長屋に住む人々の共有の生活空間である。昔は共同井戸があったし、路地の奥には小さな稲荷も置かれ精神的なシンボ

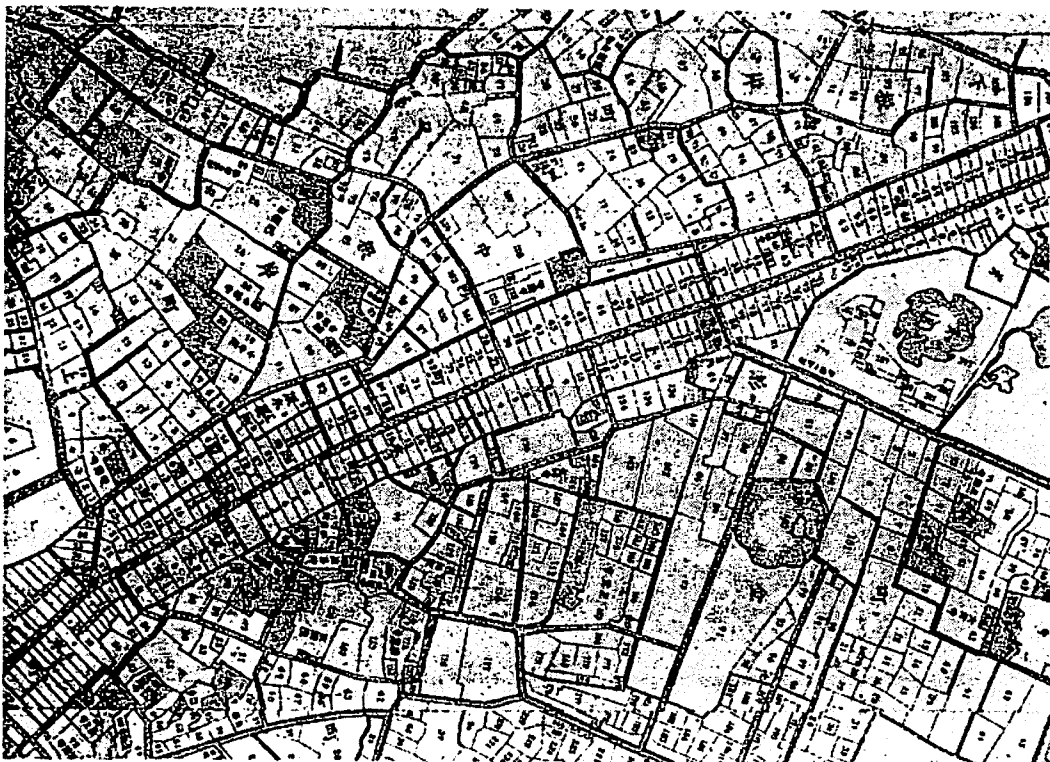


図4 明治29年東京市下谷区全図(東京郵便電信局地図)

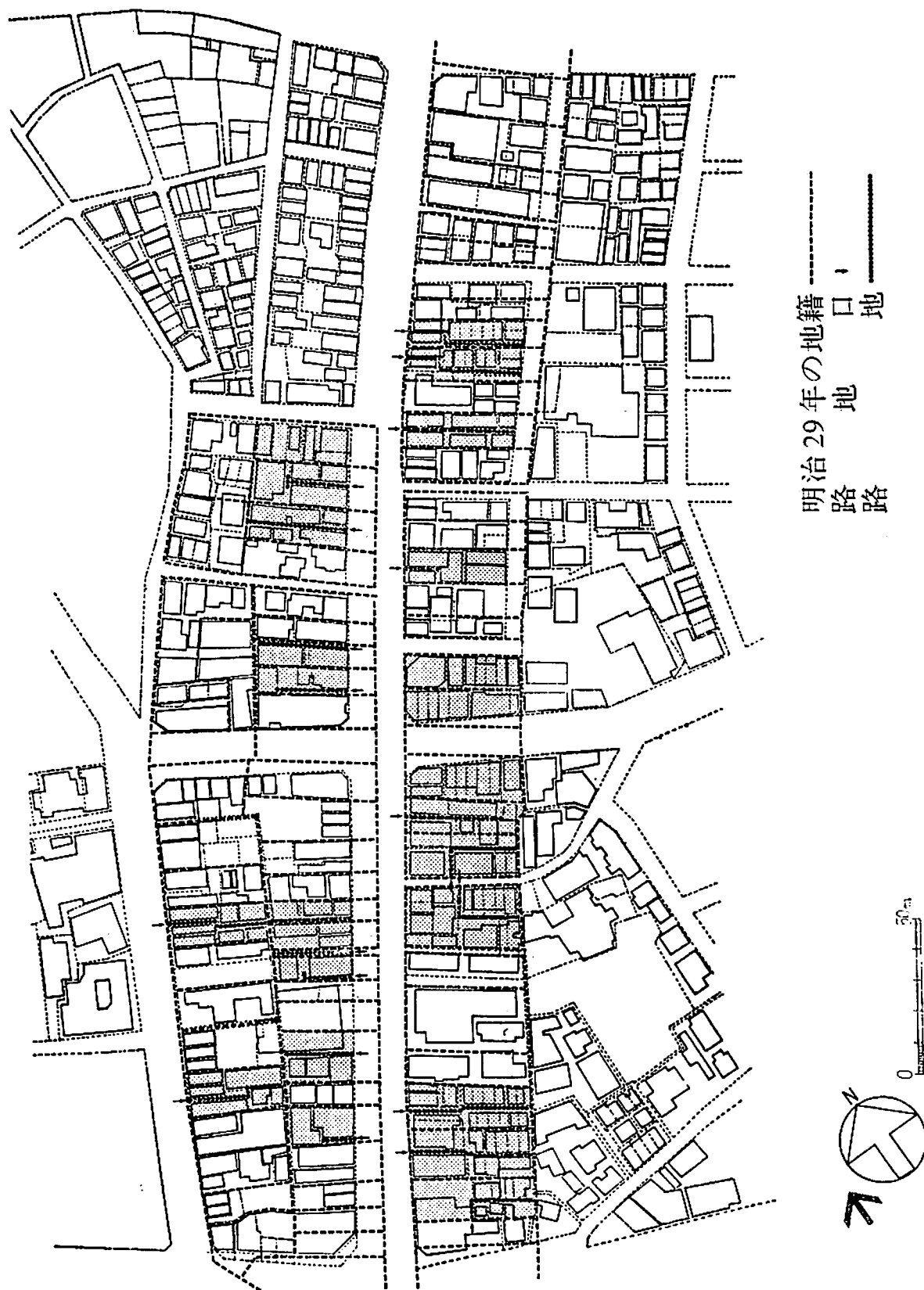


図5 明治29年と現在の地籍の対応関係

ルの役を果たしていた。このような空間的に完結した単位をなす一つの敷地割りをここでアーバン・ユニットと呼ぶ、それは同時に社会組織 (tessuto sociale) 上の単位でもある。一般に表通りの町家の中に所有者が住み、奥の長屋の住人はいずれも借家人であり、小さな社会的ヒエラルキーのもとに、相互扶助のヒューマンな人間関係が成立していた。これが江戸時代に形成された典型的な下町の住構造であり、この地区にはいまだによく保持されている。

本来はこのアーバン・ユニットが奥州街道裏道（現在の金杉通り）沿いに均一に連続して並び、町人地ができていた。その外側に寺が計画的に集中して配置され、そのさらに北側の根岸地区には江戸時代から屋敷地が少しずつできていたが、明治になって都市が拡大を始めるまでは一般の町人はそこには住めなかった。

明治29年の地籍図を現状の上に重ねて調べてみると（図5）基本的な都市構造は今なおよく残っているが、この100年間の近代過程で、伝統的地区構成は少しずつ構造変化を受けたことがわかる。対象地区は次の五つのブロックに分けられる（図6）。

Aブロックには、アーバン・ユニット、後方の水路の跡等、本来の都市組織がよく残っている。同時に古くからの住民も多く、稲荷もあちこちに見られ、路地を中心とした社会組織もよく残っている。

Bブロックは、震災で焼け、復興に際して裏側にも道が通ったため、内部組織が変化した。聞き取りによれば、その時点で住民がだいたい入れ替ったというが、その後この地区の生活にすっか

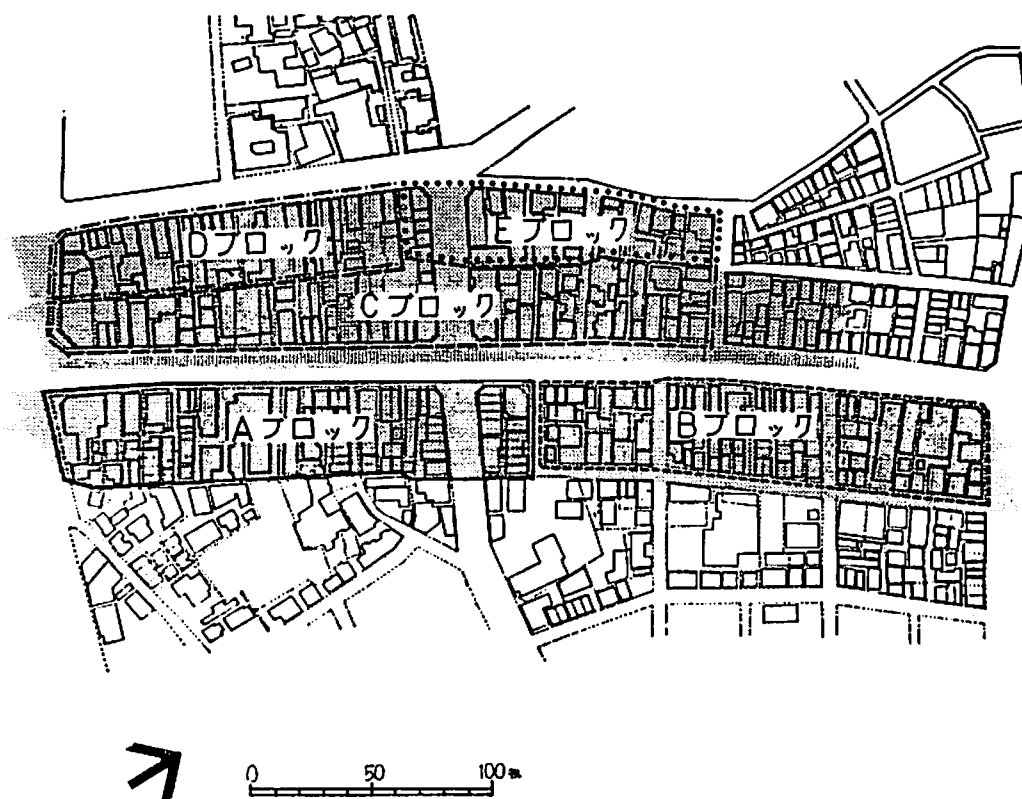


図6 性格の違う5つのブロック

り融けこんでいる。

Cブロックは、明治40年頃の道路拡幅によって前面を削られたため、内部組織にも変化が見られた。

Dブロックは元々、幕府の簞笥奉行組の同心に役地として給与された、裏道に面する住宅群であったことを反映して、小さな町家と長屋の組合わせが今でも見られる。

Eブロックは開発が遅れ、最近まで墓地等の空地が残っていたため、組織化が不規則である。都市構造の変化は、生活の場である前述のアーバン・ユニットの構成の中に鋭敏に反映されているので、その分析をまず行う（図7・8・9）。

最も典型的な本来の形式は a_1 であり、Aブロックに多く残っている。道に面して二つの町家が並び、その間から路地が奥へ入り、それに面して2列の長屋が置かれる。 b_1 は間口が狭い敷地の構成である。Cは側面に公道が通る場合であり、近代に新設道路ができるごとにこの形式がふえる。

Cブロックのように道が拡幅され、敷地の奥行が減ると、 $a_1 \rightarrow a_2$, $b_1 \rightarrow b_2$ の変化が生じ、裏長屋が失われて個人主義的な独立住宅に置き変わり、庶民的なコミュニティが崩れる。

Bブロックでは、裏側に道が通ると、それに面して町家が現われるため、 $a_1 \rightarrow \bar{a}_1$ または $\bar{a}_2$,

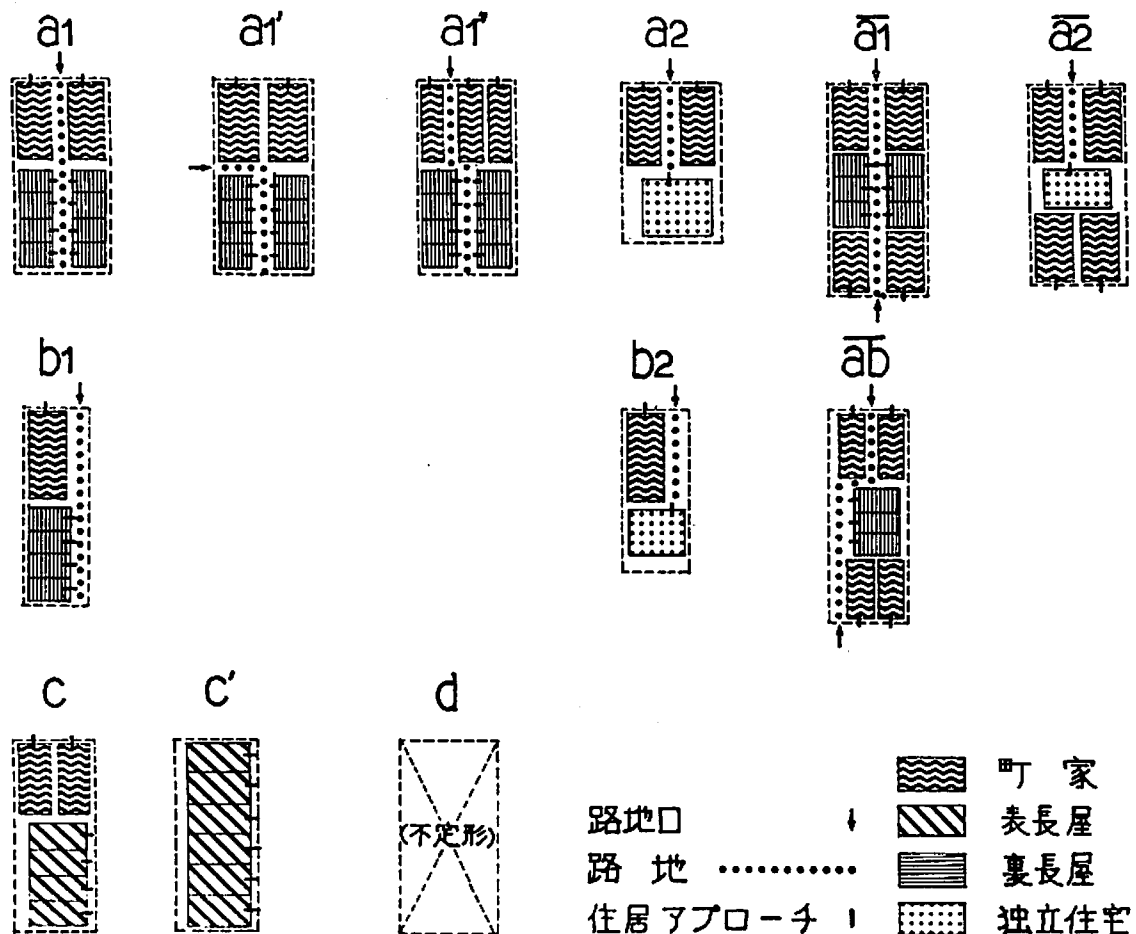


図7 アーバン・ユニットタイプ図

$b_1 \rightarrow \overline{ab}$ の変化がおこる。

このように都市構造の変化は必ず生活環境の変化をもたらし、その過程では常に庶民の生活の場である長屋が失われる傾向にある。しかしまたこの段階ではアーバン・ユニットの枠組自体を壊すような大改造は見られず、自律的に環境をつくる原理は働いていた。

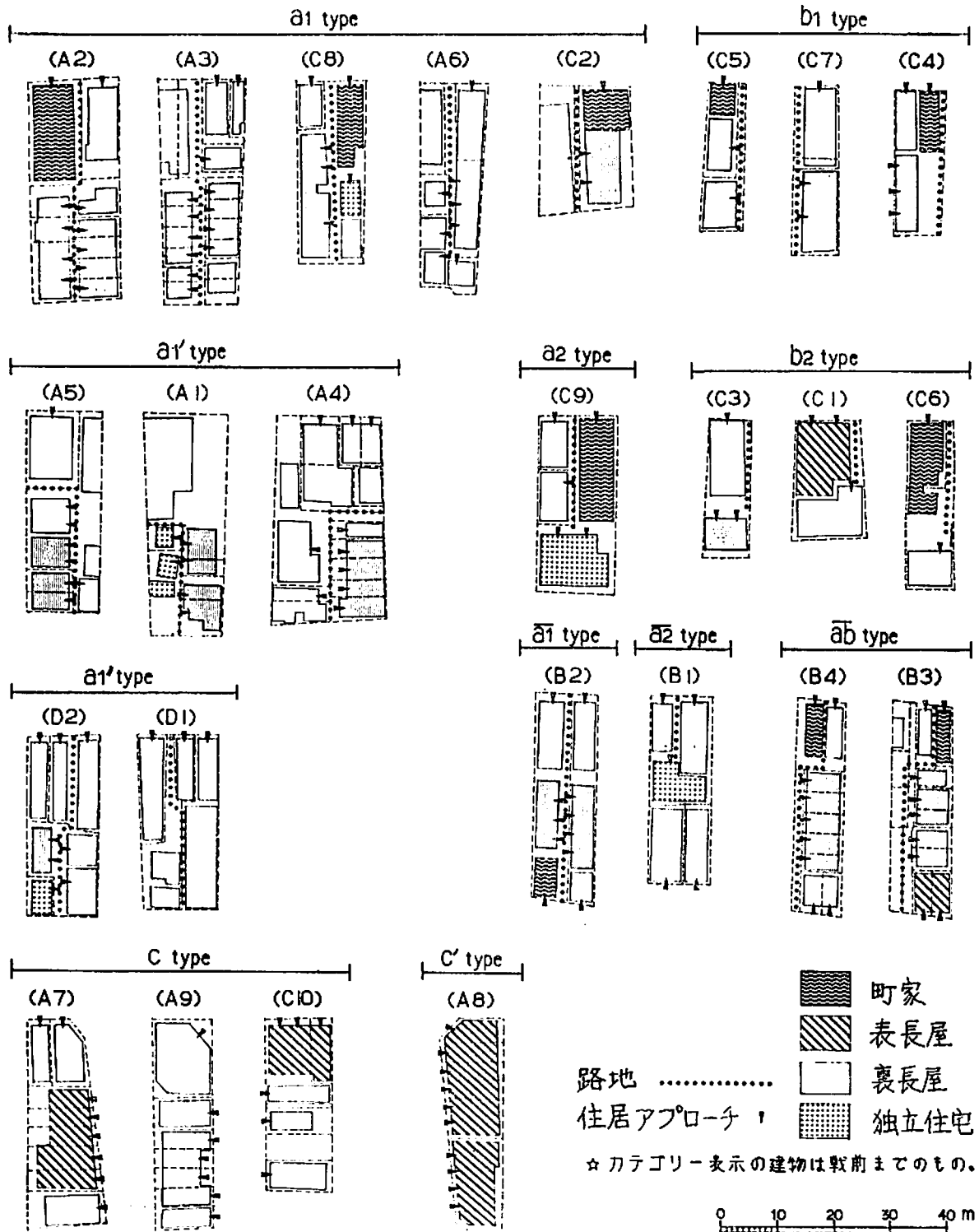


図8 アーバン・ユニット分析図

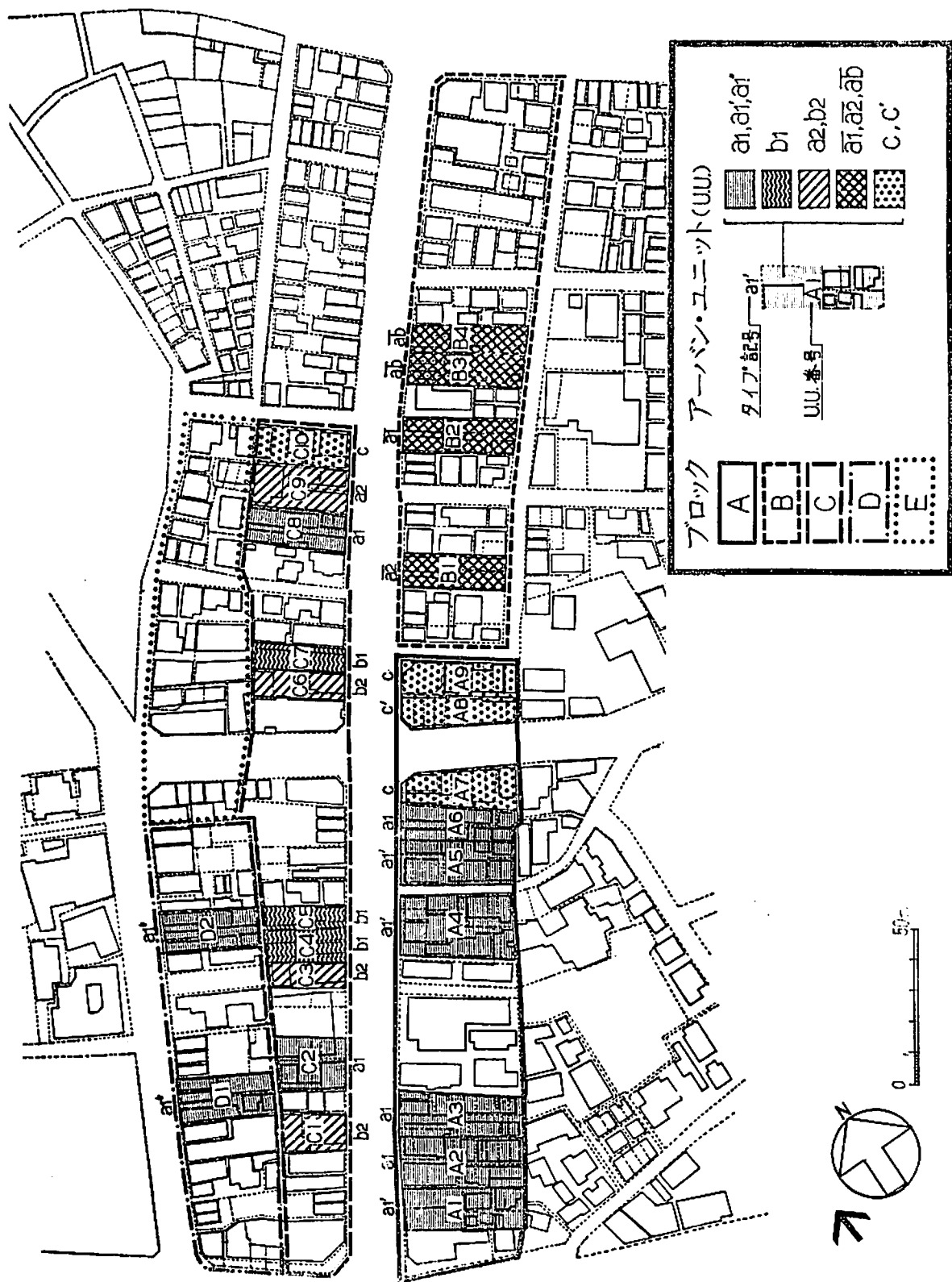


図9 ブロックとアーバン・ユニット

§3. 建築類型

次にこの地区の建築を見よう。伝統的都市構造を保持したここには、町家、表長屋、裏長屋、独立住宅といったカテゴリーの住宅建築が分布し、伝統的な個性ある環境をつくっている(図10)。

みせと住宅機能をもつ町家は図11、図12のように通り土間形式と前土間形式に分れる。通り土間形式は日本中どこにも一般に見られる町家の形式であり、通り土間をもち、ザシキ、土間、ハナレをもつ(図11)。前土間形式は通り土間をもたない簡潔なプランの町家であり、高密都市社会を築いた東京に特徴的なものである(図12)。

前土間形式のコンパクトな町家が集合したものが長屋式町家であり、これも普通店と住宅併用である(図13)。隣棟間隔が節約でき、高密都市の中で経済的であるため、時代が下るにつれふえ続け、特に震災復興時の区画整理とともに広範にひろまった。この地図にも数多くのサンプルが並んでいる。

このような町家の構成には、時代とともに次のような変化が現われる(図14)。2階の立ち上がりが低く質素に見えていた①の段階から、まず2階が充実して、②の段階で伝統的形式が完成する(明治後期)。震災復興とともに、③以降、新しい時代の精神を反映してこのようなポピュラー建築でも洋風化、近代化が始まる。まず1階の瓦ぶきの底が失われ、そこが手すり付きのフ



図10 建築類型の分布図

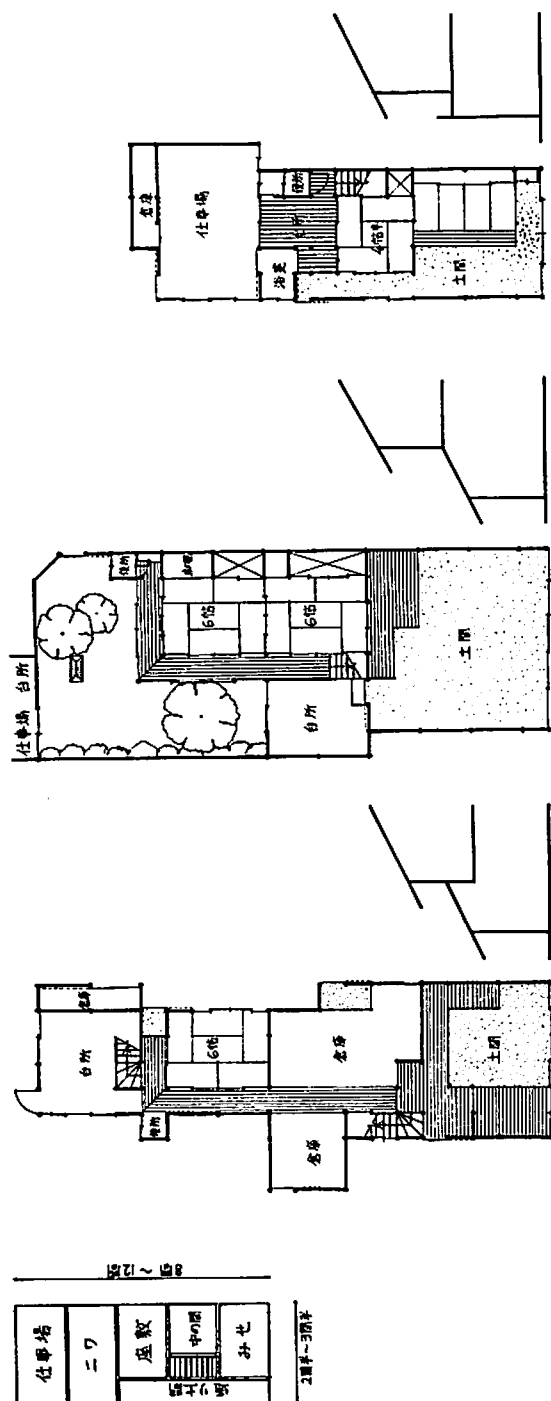


図11 通り土間形式の町家の構成図式と1階平面図

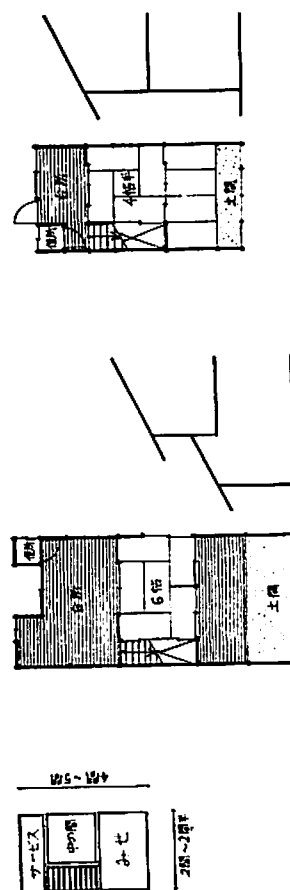


図12 前土間形式の町家の構成図式と1階平面図

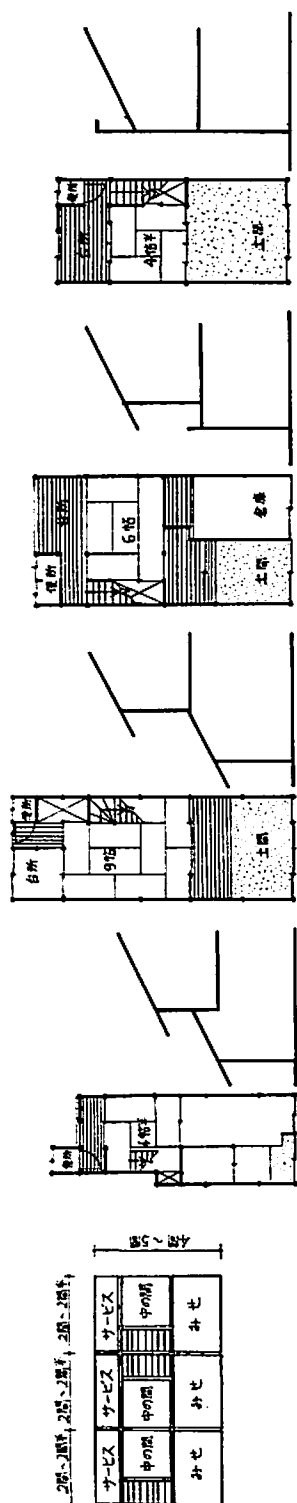


図13 長屋式町家の構成図式と1階平面図

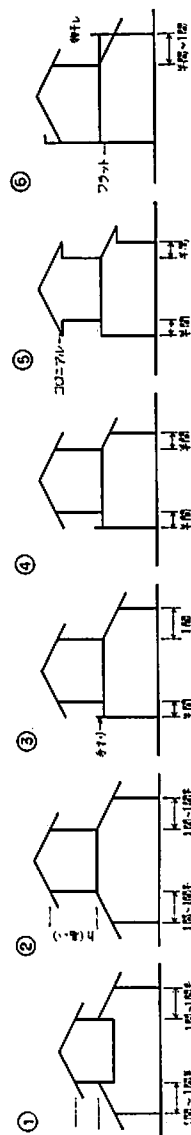


図14 町家の変遷模式断面図（左側が道路）

ラットなベランダになり、同時に2階のセ
ットバックが小さくなる。続いて⑤では洋
風のデザインが2階の軒回りにも及び、最
後の⑥では2階の屋根まで隠されて、垂直
な銅板ぶきのファサードが完成する。こう
していわゆる看板建築と呼ばれる新しい町
家の形式ができて上がる。しかしこの過程で
は、2階が充実し部屋数が増すものの、み
せ、中の間サービスという1階の伝統的な
構成はほとんど変化していない。

戦後になると、この基本的構成が崩れ、商業ベースとしての土間が拡大される。そのため2階の居室が増築され、総2階になる傾向がある。こうして住まいとしての環境は悪くなる。また通り土間形式の町家の場合、表と裏を結ぶ軸としての通り土間が生活上不便だという理由で失われる。結局、近代化による商売形態、生活形態の変化が建築の構成に大きな影響を与えている。しかし、職住併用の町家の在り方に変わりはなく、従来のコミュニティは同じように存続しうる。近頃の人の住まない商店、事務所ビルの並ぶ町とは全く異なり、生活のリアリティと結びついた美しさがそこにはにじみ出ている。

これらの商業建築に対し、東京での庶民の伝統的な住いは路地に面する裏長屋である。人々は共同の井戸、水道を使用し、稲荷を置いて横丁と呼ばれるコミュニティを形成していた。空間と生活のヒューマンな関係がそこには成立していた。

だが裏長屋のプランもやはり、時代とともに設備の近代化と個人主義的生活意識に

よって、図18のように少しずつ変化してきた。初めは台所が路地側にあり、共同井戸・路地・台所が一体となった有機的生活環境があった（aタイプ）。居室を増すために2階がつくられても、1階の構成は同じであった（bタイプ）。だが水道が各家の中へ引かれると、台所が裏へまわり、路地に面する前室、玄関が整備される（dタイプ）。さらに袋小路だった路地が突き抜け、公道化すると、長屋の前面の構えが堅固になり、建物内部と外部空間の有機的結びつきが失われる。それまで全く無防衛だった長屋の玄関にも鍵がかけられるようになる。環境の大きな変化は必ず地域のルールを知らないよそ者の侵入とともに進行するのである。

このように長屋も都市の近代化に対応しつつ徐々に個人主義化、独立住宅化の動きを見せてきた。しかしそれでも、郊外の住宅地に比べれば、まだ長屋が残っている限り、庶民の人間関係が存続し、建築と都市空間が有機的に結びついた生活環境が生きているのである。このような都市空間は、元々江戸時代の封建的社會の産物ではあるが、庶民の築き上げてきた生活文化の舞台であり、近代都市のつくり出すことのできない人間的環境の質をもっている。



図15 完成された伝統的形式の町家（図11の中）



図16 1階の底がベランダ化した町家（図11の右）



図17 昭和初期の長屋式町家

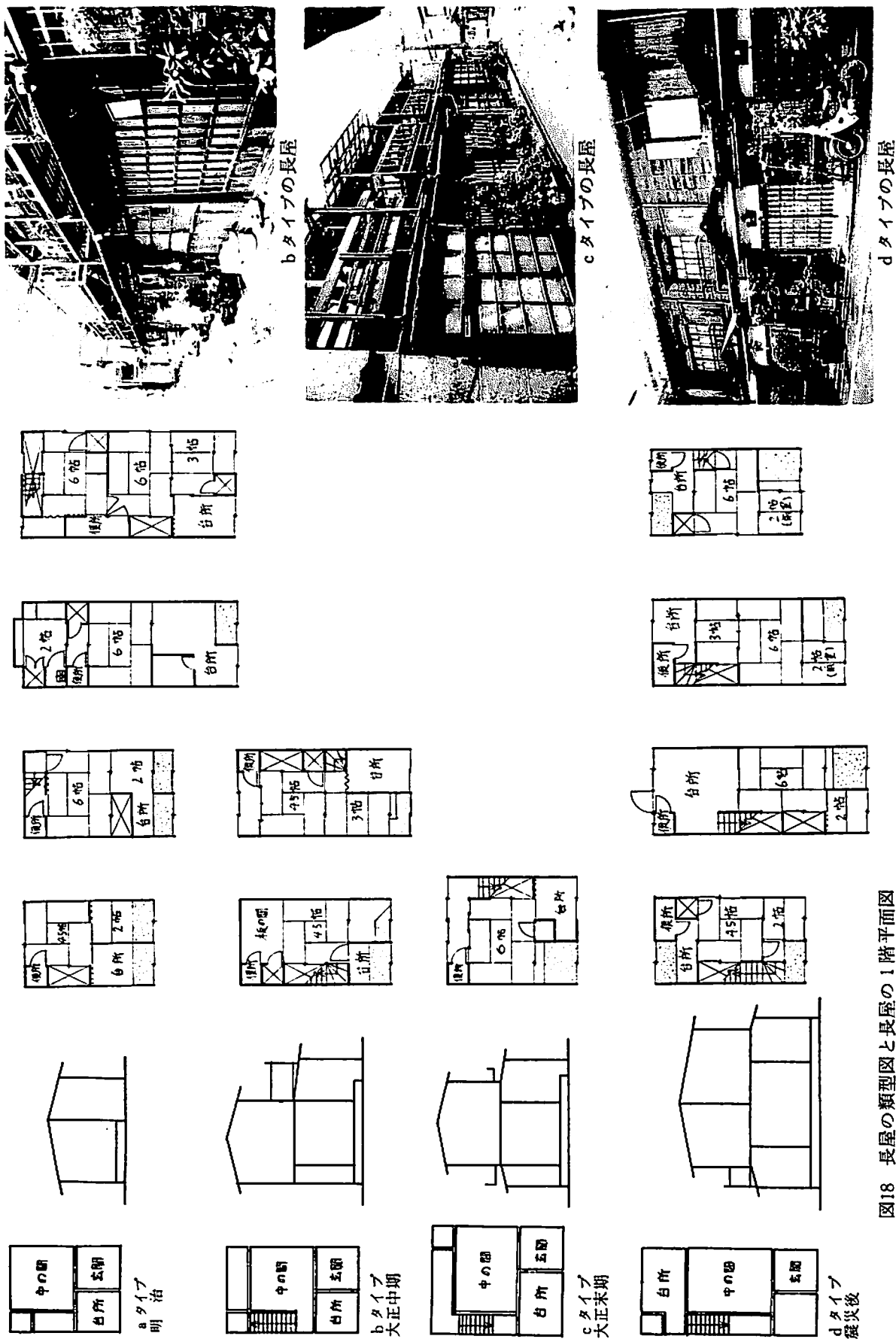


図18 長屋の類型図と長屋の1階平面図